

活動報告書

報告日付:2018年4月12日
事業ID:2017409463
事業名:大阪府箕面市における
第三の居場所の運営
団体名:特定非営利法人
トイボックス
事業完了日:2018年3月31日

事業内容:

「家でも学校でもない第三の居場所」をつくり、そこで社会的相続を補完する。そのために、社会福祉士・臨床心理士など専門的なスキルを備えたスタッフを配置し、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や基礎学力の向上、非認知能力(挑戦する意欲、自ら考えて選ぶ力、状況を冷静に振り返る力、仲間と力を合わせる力、最後までやり抜く力)の向上を支援する。

1.事業目標の達成状況:

【申請時の目標】

- ①利用拠点児童の募集
- ②子ども支援の充実
(子どもの居場所づくり、食事の提供、学習支援、生活習慣支援、非認知能力形成支援)
- ③保護者、学校、地域、行政との関係構築
- ④ 全国展開に耐えうる事業モデルの構築

【目標の達成状況】

① 利用拠点児童の募集

対象小学校へのチラシの配布、箕面市教育委員会や対象小学校との協議、箕面市のソーシャルワーカーや対象小学校教諭の視察受け入れなどをおこなった。全児童が対象世帯に該当するため、拠点利用料は無料である。

②子ども支援の充実

(子どもの居場所づくり、食事の提供、学習支援、生活習慣形成支援、非認知能力形成支援)

拠点がほっと一息つける居場所になるように、子ども一人ひとりの個性や特徴、家庭環境に配慮した支援計画を作成し、子どもの背中をそっと後押しできる支援に力を入れている。学習支援や生活習慣形成支援に加え、非認知能力を育む取り組みを行っている。みのお拠点で育む非認知能力を生き抜く力と定義し、その力の育成に力を入れ、主に2つの取り組みをおこなっている。

1つは、豊富な体験の機会を提供する時間を毎日設けている。(名称:わくわくたいむ)。2つ目は、子ども達が関心のあるテーマに挑戦するプロジェクト型学習(名称:わくわくプロジェクト)である。また、このプロジェクトの成果を発表する機会を設け、保護者を招いたイベントを3

月15日(木)に開催した。

図1.わくわく一眼レフ体験



図2.わくわくロールキャベツづくり



図3.節分パーティ



図4.みんなでアボカドを育てよう



②保護者、学校、地域、行政との関係構築

保護者との関係:より適切な子ども支援のために保護者へのアプローチは重要である。そのため、信頼関係構築に向けて様々な取り組みをおこなってきた。

例えば、子どもの送り迎えの際に児童の様子を各保護者にお伝えしたり、また保護者を夕食に招く「ママタ食会」の企画や、さらに保護者全員を拠点に招いて、プロジェクト型学習の成果発表会をおこなった。保護者との信頼関係はできつつあり、保護者の子育てや家庭の悩み相談にお答えする「1on1相談会」もおこなっている。

学校との関係:オープン当初は第三の居場所事業の趣旨を理解して頂くことが難しかった面はあるものの、通所児童が増えるにつれてより密な関係が構築できている。児童情報の共有や子ども支援の協議をおこない、学校と連携を図っている。学校からは「学校でも対応に困っている子ども達の多くが大変お世話になっている。拠点が校区にあってよかった。」「通うようになってから子ども達がどんどん落ち着き、学校での様子が変わった。大変助かっている。」との感想を頂いている。また、「学期に1回、子ども対応について情報交換会をしましょう」といって頂いており、2018年の4月からおこなう予定である。

地域との関係:近隣に市の開放教室(中学校の空き教室を市民に開放している部屋)があり、市民の方々からお声がけを頂く機会が多い。今後、わくわくたいむなどで連携を図っていきたい。

行政との関係:非常に緊密な連携が取れており、相互に情報共有をおこないながら、一人ひとりにあった子ども支援をおこなっている。

④全国展開に耐える事業モデルの構築:①～③について、地域性、スタッフの属人性、通所児童や対象家庭の属人性に関わらず、拠点運営をおこなっている。通所児童が増えた場合における①～③の継続性を今後検討する。

2.事業実施によって得られた成果:

通所以降、多くの子ども達の言動は徐々に落ち着き、突発的な暴言等が減少する。また、物事に挑戦する意欲が高まり、保護者からは「脳が活発になっている。」「何でも意欲的にチャレンジするようになりました。」との感想を頂いている。みのお拠点で毎日おこなっている豊富な体験の機会の提供(わくわくたいむ)の効果が表れ始めている。

親へのアプローチとしては、保護者の子育てや家庭の悩み相談にのる「1on1相談会」をおこなっている。その感想として、保護者から「家族の笑顔が増えました」「子育てに悩んでいたので、先生(みのおスタッフ)の意見が聞けて良かった」とのご意見を頂いている。

3.成功したこととその要因

申請時の目標に対応するかたちで、成功したこととその要因について記載する。

①利用拠点児童の募集:オープンから2か月間は児童集めに苦労したが、12月下旬から3月下旬の3か月間で通所児童を増やすことができた。

要因:1人目の通所児童が確定した後から、より良い子ども支援をおこなうことを目的として、児童の情報交換・情報共有をするために対象小学校へ積極的に足を運ぶ。また、通所が確定した児童一人ひとりの支援計画を作成し、子ども対応を丁寧におこなったことが、児童の通所以降の様子の変化や、保護者の評判を生み、口コミをきっかけに学校からの評価も変わった。

②子ども支援の充実(子どもの居場所づくり、食事の提供、学習支援、生活習慣支援、非認知能力形成支援):子ども一人ひとりにあった支援計画を作成し、スタッフ全員でアクションプランを共有して、チーム体制で子ども支援をおこなっている。また、非認知能力を育む時間(わくわくたいむ)を毎日継続して提供している。

子ども達からは「今日のわくわくたいむは?」「わくわくたいむで、いろいろ体験できるから楽しい」との感想をもらっている。保護者からは「ひとり親家庭の私一人では、子ども達にいろいろなことをさせてあげられない。有り難いです。」「子どもがどんどん意欲的になって嬉しい」との感想を頂いている。

要因:スタッフの役割分担の明確化、様々な会議の目的の明確化、子ども支援をおこなう上で各スタッフのアクションプランの作成が要因である。非認知能力の取り組みが継続している要因は、通所児童が確定する前にわくわくたいむの企画案を蓄積してきたこと、スタッフの持ち味を活かした企画を作成したことなどが挙げられる。

③保護者、学校、地域、行政との関係構築:概ね各機関と関係を構築し、情報共有をおこない、子と親への適切な支援体制を構築しつつある。

要因:各機関といつでも連絡が取れ、情報共有を図れる体制を構築することが重要であるが、そのためには一人ひとりの子ども達に対して日々丁寧に向き合い、子ども支援・家庭支援をおこなうことが大切である。そのような対応が子どもの落ち着きや言動の変化や保護者の評判に繋がり、保護者・学校・行政との連携が促進される。

④全国展開に耐える事業モデルの構築:地域性、スタッフの属人性、通所児童の属人性に関係なく①～③で記載した事項を達成した。

要因:拠点運営の理念を作成・共有したこと、子ども達が守るルールを作成し徹底したこと、フラットな組織でありつつもスタッフ全員に役割がある組織体制を確立したこと、より簡易な情報共有体制を確立したこと、スタッフの疲弊を防ぐ様々な取り組みをおこなったことなどが挙げられる。

4.失敗したこととその要因

申請時の目標に対応するかたちで、失敗したことについて記載する。

①利用拠点児童の募集:オープンから2か月間は児童集めに苦労した。

要因:無料の対象条件に当てはまる小学1年生から3年生の児童を集めることにこだわったことが失敗の要因である。対象小学校が預かってほしい児童との間にズレが生じていた。対象学年や学校の要望を伺う中で、折り合いをつけていく方法も考えられたかもしれない。

③保護者、学校、地域、行政との関係構築:オープン以来、拠点運営や子ども支援、保護者・学校・行政との連携に力を入れてきたこともあり、地域との連携にはまだ強化できる余地はある。

要因:子どもが来所し始めてからの三か月間(1月~3月)は、拠点運営に注力していたために地域連携に手が回っていないのが理由である。

事業成果物: 事業報告書